菊寿童

四止

208
4
728

国立国会図書館　　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

きくゝ壽たり

立稱拾編

208
4
728

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

菊壽童霞盃

九編 上冊

山東庵京山作

一陽齋豊國画

弘化四歳

丁未春新販

栄久堂上梓

菊壽童霞盃をかくれけて既に九編のくさをまくにいたれり
醒てのうへれば別も屋てる作者のまきこゝなれば有りしろうね
菊の水草のひるにまりも作り菊もおらでさるをはまるぎんが
さく茲もちゐさかゝんと此九編を全本のをわりとなりつれ
ど前に出したる人物の末をむすばさるもなれば十編の
巻にあらずて霜後の香をも殘さまゝりとてなん

丙午菊月にちりき日　山東庵京山

未春新板

弘化三年丙午仲秋稿本

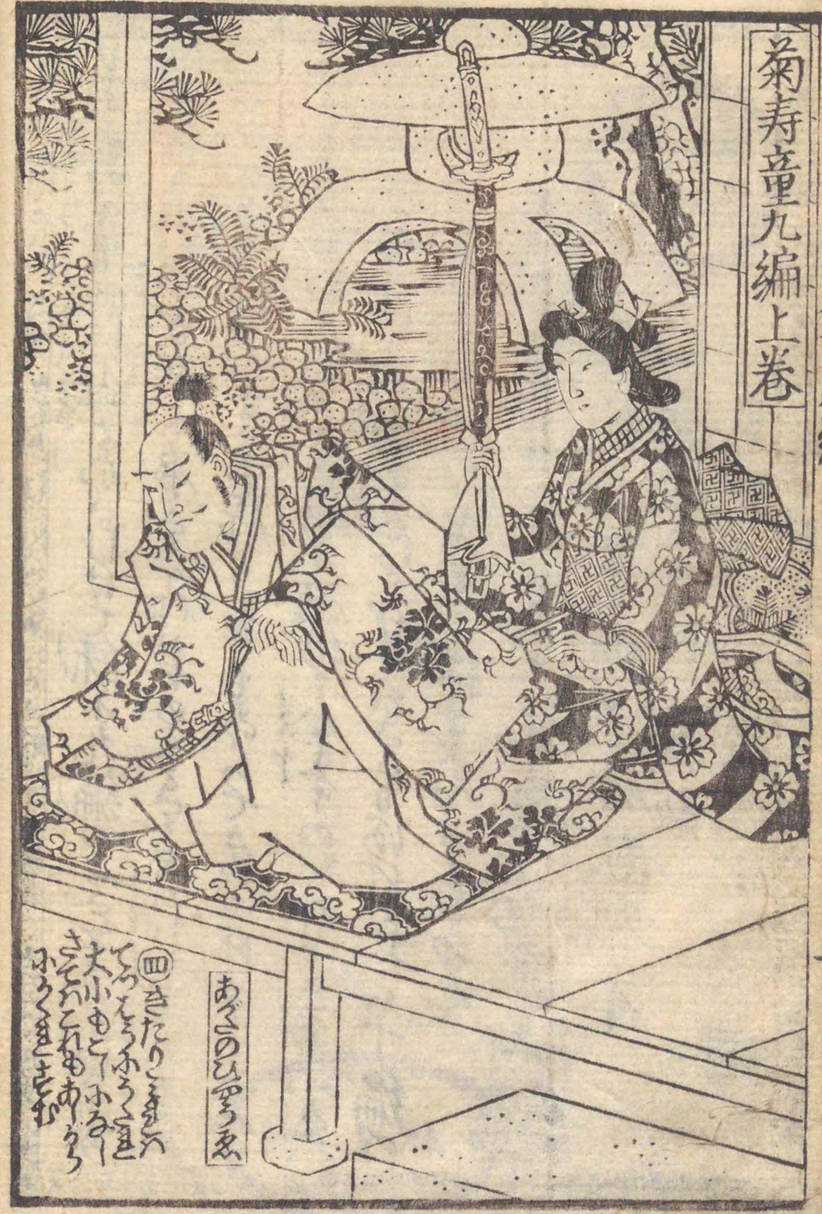
同初冬上梓發販

東都書賈栄久堂

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

菊寿童九編上巻



あぐらのひやう衣

(四)きたりこまかに
てうそうふうこと是
大小もこゝかるゝ
さそかこれもあらう
ふくまきもの

(三)つまくつゞバ
それをニツのそう
とりてきさんも
かるくんとあうふほニ衣が
をしふよりそよりこゝろ
ざしうたひ童衣今ありの
八郎ぐらそうまとそ
のあとむのうちわよろこび
お袖をつれよりあうら山へ日ごの
かくしこゝろそうるとゆのこゝろ
けりさまざまがのちよう時うる
佐上の国へうさんれまもる
あんなんなくんよう時をうる
お社と菊寿ゆのかが
ゆすこゝろくんかも
みるもあうけう
一年さそ又つゝ
一年そくめのめをを
おのほうのこゝろ
きさこゝろくんとそ
みそともくく一年うる
きてさうさる四方山平
おのひのとのさそう

ときそれとめ
さるひとうつゞり
一年い菊寿たうが
おほもりの八郎ぐう
さのなうくまて
久めの父ふ袖あ
うまさ今ぐたまう
八郎ふ心のるれて
さくあたうかれ
生むあゞら山つま
四うくちのみもまう
八郎の父ゆのめをを
むう上より時が
けりのとまさて
こうくうけんと
おのひこそを
おくそれそのけるれ
久めの父の老ん
すめよのひめを
菊寿たうたなれ
人ごろまるの四方
あゞら山をせめろんれ
四方ほよのさ
ひめをうぐひかまくら人(一)

ぬす人のあうさぎ
ろくんとさころの
あぐらりあぐさの
ひやうをふぼのの
ようをひけれが(五)

こんひの仁奴

(六)ひやうふ衣
あぐらのひやう
ちやうくう

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

第二段

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

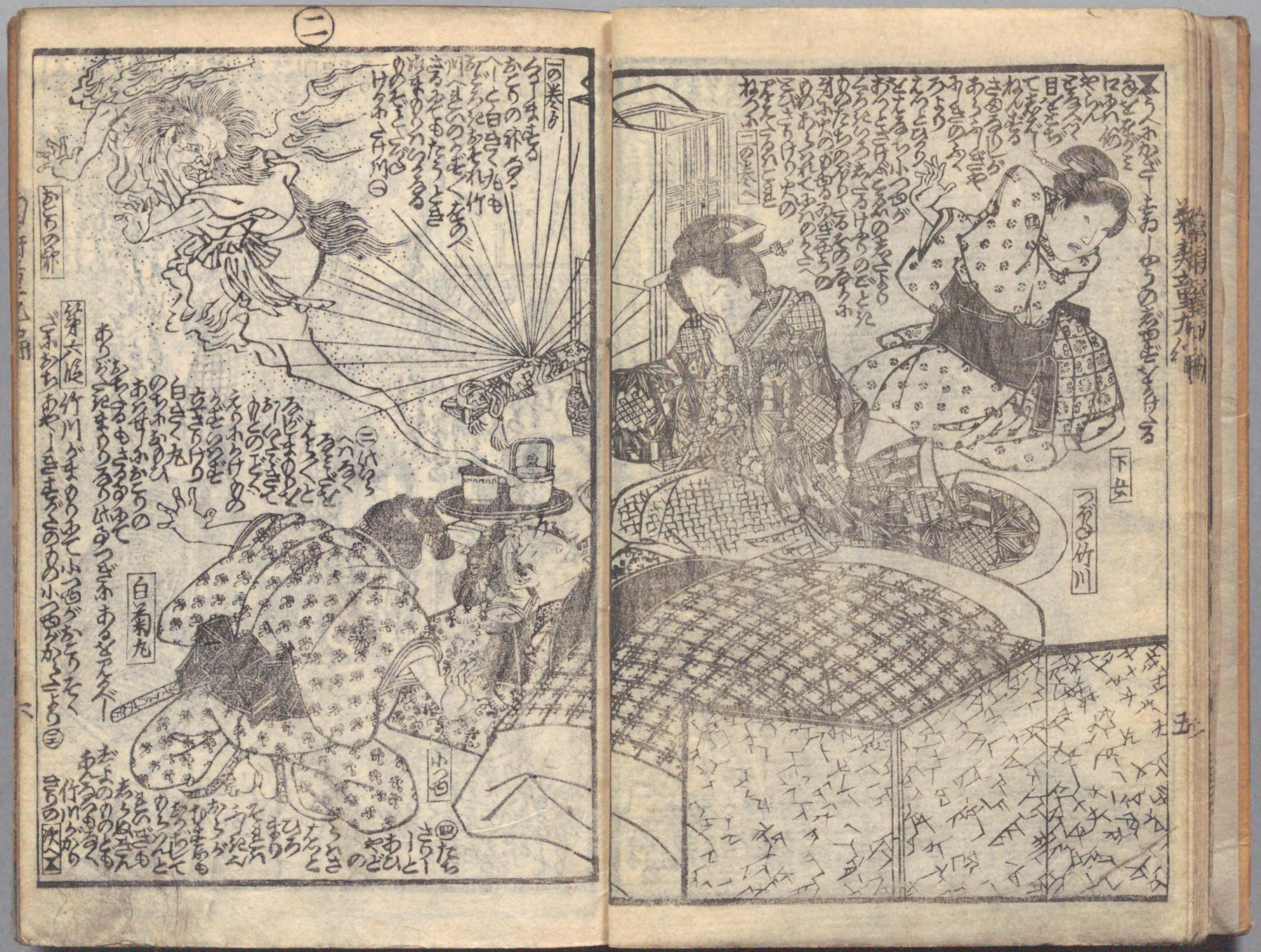
ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用



国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

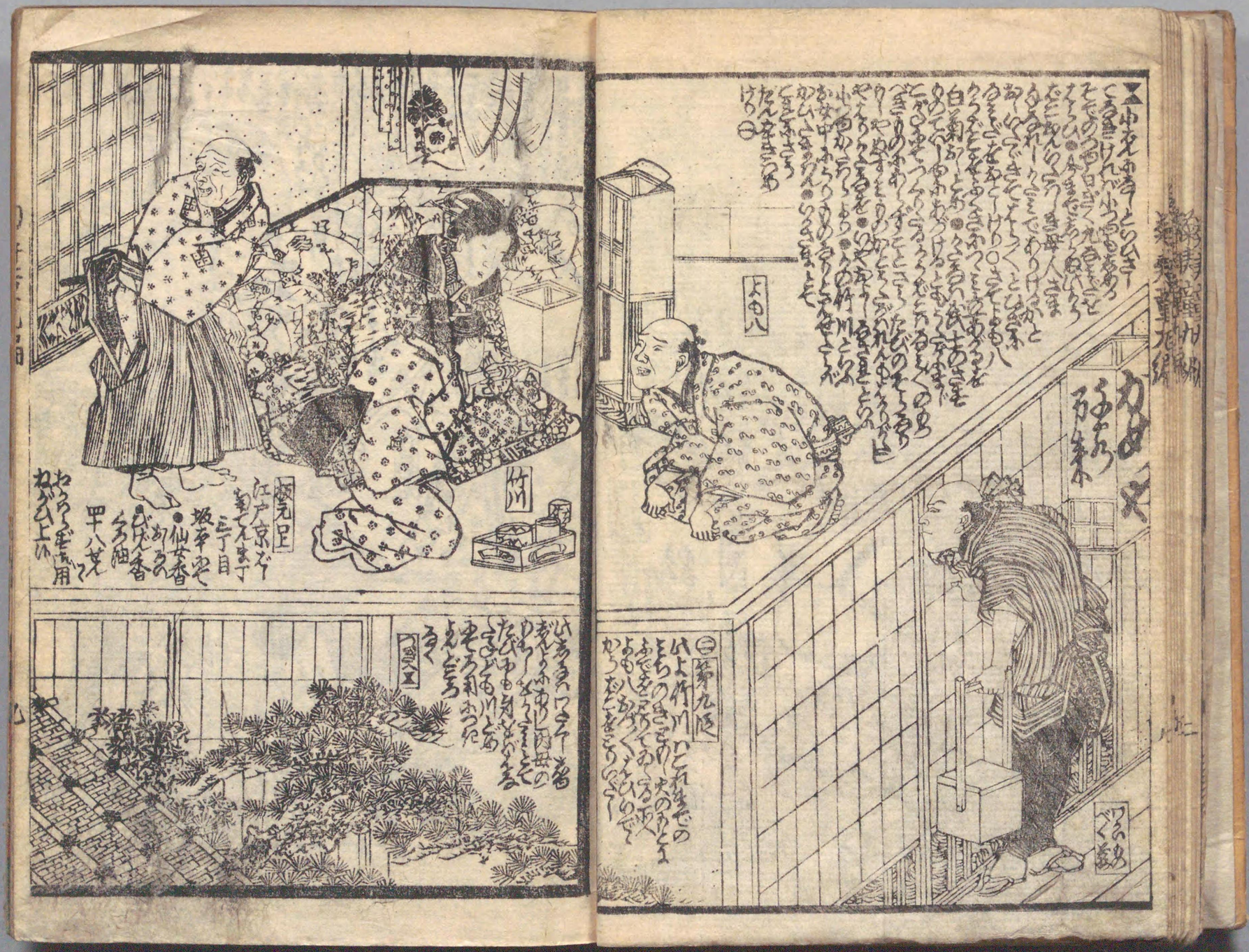
ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用



国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

山東庵京山作
一陽齋豊國画

下

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

菊寿童九編 下冊

京山作

豊國画

弘化四年

丁未春新刻

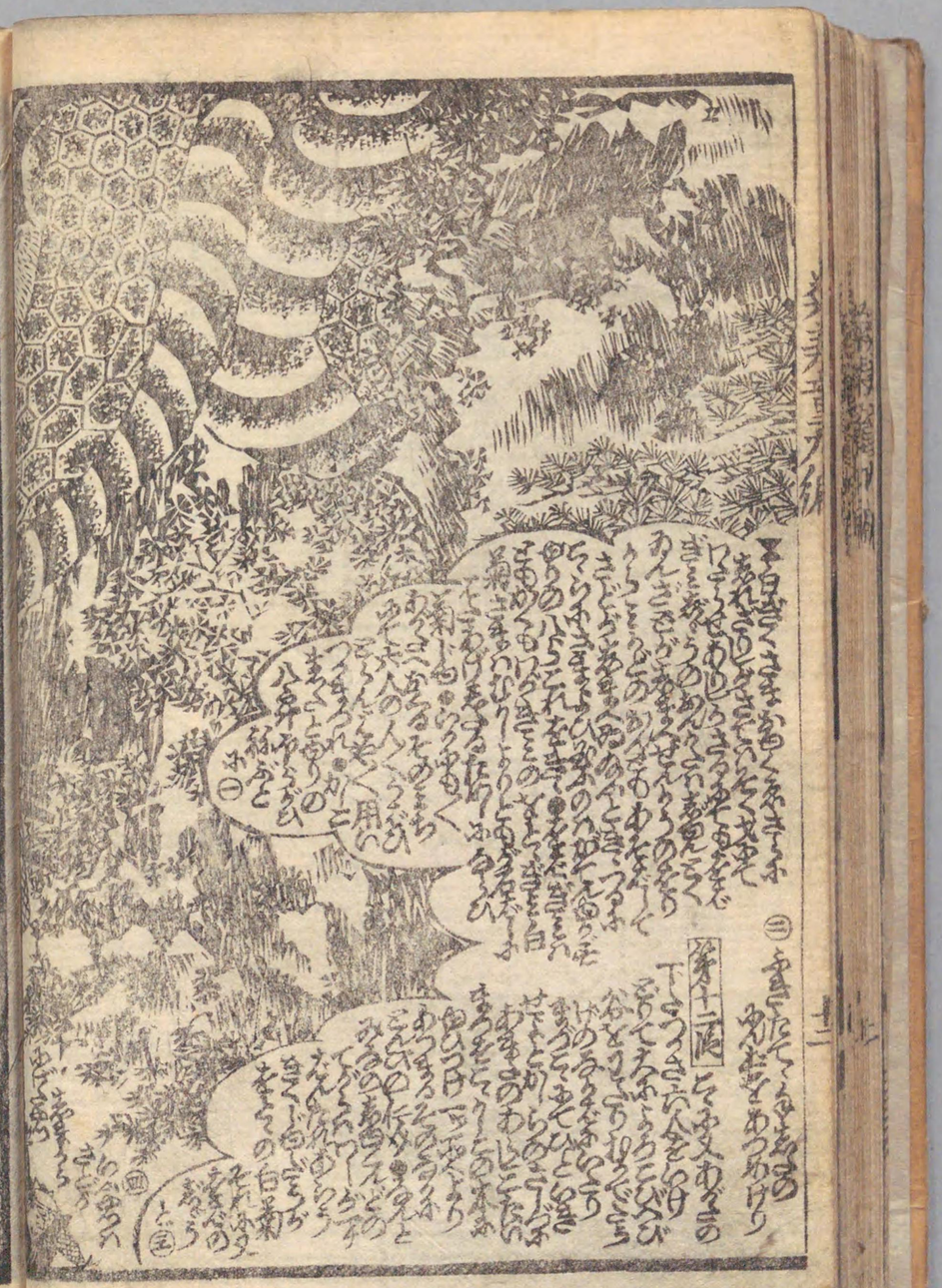
山本平吉販

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用



国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728
ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

菊壽童十編上のまき

全部めでたく大尾

八十翁京山作

一陽齋豐國画

江戸より町親仁橋
榮久堂山本平吉

門人関敏画

○草さうしの沿革

京山按に竹取物語は源の順和語の作とあれば今よりハ千年にちかき物なりそのち二百年ばかりたちて●うつぼ●濱松●住吉●源氏物語などいづまも根なし事の作り物語なれば今いふよみ本の雅たる物なりそ中にもまた松物がたりとさしこ上物がたりハみどくかきたる物なれば今いふ艸さうしにもるゐまゐりさそちかたむかしの四百年お足利時代にいたりて御伽さうしとそ廿二種ありそ外●白雲姫物語●とみるべし物語●松風物がたりなどいふ物おのくさし絵あり此るゐあまたありて本もちひさくまろさく今の草さうしハこれよりぞおとまるさそ世の中にてろたうのおとの㊀

㊁おそろしきをしるゝ

やうになりたる寛文のころにいたりかのお伽さうしの中よりおもしろきをとりでゝ小冊としてをきたる子どもはなぐさめとしたり

そのち次へつゞく

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

今より六十年おの天明の比名たゝる草さうしの作者京山若かき時よりあしみ一京伝公羽の友だち也

新作を出せり是も評ばんよろしきうち多かりそのうち五十年ばかりたちて松のこゝろふかう名川春町作なり●金と先生栄花の夢とかく上下二さつ二十まいの戯作ばかりなり

百二十年いぜんの正徳享保のころはいまだ江戸ゑを菱助五郎清春などの絵師作をもちゐて子どもの耳はおぢえたる年若金時小ざるおどりをかくばかりなりしに上下二さつおよそ一年ばかりたちて

時の作者のこゝろぎけうくのこゝろもちのよろこばしきを

（一）四ノ二

つゞき八冊物にて大ぶんにあたりしより●馬琴●三馬●柳亭の作の風

ゐのこゝろもち●さて戯作廿四五年おいてもさのみ文化のそのゝ物価人とのゝ作者かゝれ行ことの如金ときそのゝ後二冊ぐ二ねんあまりもかゝりて草さうし一部ぐ

京伝翁八百やおそがきを

（一）

次へつゞく

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728
ガラス使用

四篇(へん)まるるりかくて近年よりなり柳亭が世話のもうれの
いろけれいとまくしくつきたるもみる人あるぎ(り)い草さし
中の源氏物語とやいうまし柳亭のオ(ハ)おかしぎ
ぎがさぐ(ご)ぎてかかいあしのうえなり此ものあら
よりのちつぎ物語をあらて編(へん)をあされるゆゑ
さしの五篇(へん)まるるり●されば此菊寿
童も今より十八年以前天保二年辛
巳初へんを出し去年九へんに若狭をき
めけること又十へんをと板元のあつらへに
まぶく若いとりぬれど秋にそるまぶよのこる菊
寿童ことそれ花のいろかもみくまるふうろ
たるへ十へんの十月菊のをなりとしあらし

嘉永元年五月稿本
十月上梓

西春新発 八十翁 京山

菊寿童霞盃十編上巻

そうして上は時ゆけばいと美枝
十次へ系ぬすめお楠

オ一回

さるかどに久米の久いつまのお楠が
ゆ(ま)ふつけあるず久米中のくさまホ(ア)ぶを
弁をよんでめかんのものをおとさしお楠をつれて
立のきけるが入りむとのゆるとしるるふとぞ
一ツのこうをたてくふてびきさんせんと
やうふ十次べ友がをしまるを菊寿
寿をがか天人をちるよう肉のむすめ
よりのぎひめをうるびい出さんとせしがよも
ぎひめいきく寿童とのるるる月ごろと
いふ子まちでるしそれバ年をへ久るふ
あるるふ上は肉ゥ佐ぶるるしまりる
おもんさんおんより肉ゥいさうの
みんせを菊寿童へ知ろ
るをそうとおとり
より肉の北のう
るぎのそこせへ
さうけるこうよ
より北の方のきりのちうて
久米の久めでこそきさん迄
けれいやうふ十次べ系さと
方の井の水ゆうふもよろ
こびけり

オ二回

こうふ菊寿だうふより肉のきさの方
るぎのそこせんより肉といろりきてし舌だうがたそこのくる(一)

(二)あまぎの山ハ
おしよせ
いざといけども
まきくじもぐら
るるしば
かさの
自菊丸
ゆも

次へ又

仁丹の四字
けうハいの
のりの
せ
久米の
お楠

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728
ガラス使用

ふんながらまづこれへつれきされ
かとまつさとそなきけり●やどうく
きろうり殿のあまりのあまりこれるるわまあいさ
めてゐぞいてあるべしよ時げけへ
それ御十にべるがせれよう
たのをきりあせうけかちうす
きさんのそうよたてんとて
君へおりくるまえてゐん
より時こたうのみんせを
うえぐしやうぶさぐしよう時のれの
かさん山うのぐり君より時うれつや
ありうえいかぶ米のめがうえぐさりくる
よう時ひさうのみんせんおつてうえたるき
るえおるぐうより時よりまへゆスーもえ
又ひものをうえうけそうまりりーん
わんせをうぐひくるくもりのあるる
よおのまうーふよう時より君へおく
てまおーすうるりれぶすうねれ
せのだのあスーともスゆえより時が
二ふうきをけんさうおうスー
さそよう時ナスゆさみい中ぐえぐ
なひやきうのさんぐちうふ山ぐち
のかりとうりて山ふかれきるる

(二)よびて久米のめ
がうるをあ
させ一のふ
犬平ちより時どの
やまうてたうう
ちょうるれどあとて
をえぬけらのも

一かうの
きうなー
うええト
せんひん
をれとあふ
入の白ぎく九
をよてあり
の八弁菊
寿をりたぞそ
たるあざこのつぶ

時をれ父のかえとてうち
ひきのあるスーあうふ
ひえびー時うかぶとを
きうにりれびてれのき
ぶりをてうさる
ぶひりうあしん
上かう時かひまる
よのぎぶそうふきこう
れうこびをとしる月若
九かよう時うまぶうる
きこんかえうれいつぞ
くのれやくえたうを
きうのぶまのやえなう
なりの父きこの
本でおうスー
みやこんるう時
よをふえうやスベーこれふ
つえてもゆうのめよ上べをるる
もいかをきとてめをち白きく九
さま姫君も月うえもめのくえけう
のてぶれこもかめつぐかのぼます
いも用のれれてあの上うをぐさまれ
こも住こそれのりおもふりとうまき母あれいと土のあ
てんぐうスのあうさもうやきいてのべれが東寿ぐうまうる下さる(一)

(一)

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

▲みるくのり めのまへやうその ちりくまあわり とえのりおあをを どうけかやうくと らうくうくの 人々の身の上 おもうつろ 母きまをたをせ けてくだされ 世とるさき さーくむかれ ゆそで月ほうれも めつひるきうそうま かくしてくださされと むすめとまもに 寄進あそこされ ちゞきの身は せんちあちあ 「さそれはゆくのうらめと ひつうりけよりあれ ようとひけうみまんの きまとつこれきさのまづーし時どのと いつかり山をさりまきさんだとよきひと

とりとうりきさくあいまいたつふたのめん すりけがくあてるもよし時どのさーづ 田舎きゃりけるまでもたなどろ まひきくゆきまちだへてうとと まりてへ女あそらもうまをらふ りがくとうぶりーとぞ あぐふるり みちたるを まうのを つまとも おゐひを ぎるるまされて ぜんぜんさんきア かやとよし時ら あまくのうろけり

第四段

かくて此の方 うくこのうまく ゐまよるかをふうえ そときけまたりよし時 うようにたいむすめ よのぎとを人あちは たぶらちまれへ ①

② さくよりかれらのあむすめ かくさんとそてつかくの けいアかくらわでやし つけてる土のらく人 金もあきたまおや あまたゆめのかきま べのくきのつゆ山は のとりとやうるまくろ ふくろのねずみを 師をたづてなきを かうきよし 時ら さろらひ 一天万 乗きうの ところど まう よし時が ひつ出そ みくろあを あひおうと きまつぐへ

うろー なあり たる薬 うれらが いのちれ 姉べのつゆ ゑきまも ゐびくらの よし時けらぶる うろみらうんより ひさーぶりあそ ひゆくちきうなーし やれとけんも わろくゐ きうのてまき へびらみいの あそらーきまか つまも むまあも あきまきえて あぞー こころへも まうりけり

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

▲扨も北條義時は頼朝より四代目
頼経の後見たり時に頼経二才なりけれバ
頼朝の後室政子の方あめが下の
まつりごとをきこしめしけるに女の身なれバまつりごと
おろそかなりし時承久の比後鳥羽院
後鳥羽院白拍子亀菊を寵愛ありて
化粧田の地を給はりけるにみだれたる世なれバ人に
かすめ退をみだりにうばひけれバ時におほせて
もとのごとくかへしあたへよとの御ことのりを時
うちすておかしをみおどけきなんすくひるを
ゑんりよして義時の事よし時がはかりごとをおくまゝせ給ひ
よし時をうたしめんとて西国へおんぜんを
おくりけれバにはかにさはぎてよし時十九
万人の軍勢をひきゐて京へせめのぼり
すでに承久三年六月の事なりし

なり承久と云ふ本にあるとかや
京勢つひにまけれバよし時かたくさいふ
として後鳥羽院をおきの国土御門院
をとさの国順徳院を佐渡の国へ
うつし奉りしみかど佐渡にてかくれ
させ玉ひしみさゝぎ今に佐渡に在り
●さてよし時なる院の御孫をみかどゝ
なし奉る是を人王八十五代後堀河院
と申奉るよし時かゝるふる帝を此の
まゝに流しうつしたてまつりしのち眼もおちて
あくせおもき病をやかくまさせあり
●よし時かゝるあくぎやくありけれバ
血をはきて死したるなみだのの
ちに人々おそれぬはなかりけるとぞ

第六図

かくそよし肉へんしるすけれども心思う
きにあらざりしあまあらにあらしかくそこ
だろりゆそ志るののみうけしたるきのそこぜん女
どものにをこゞめてよし肉のうせしとりうさぎ
志も中えをまりるかのくものみがなえ祈十次
べるをめしよせるぎのたよし肉がうせるよし
をかくりさそのひけるやうよし肉どの
かくありしるまづたうぶんいかしあぎ
こしそしまつけているきがらをとこに
あきそいのしやしきうつのやまひ
ゑやうのため志もやうえとかゝもう
のめのくもひろうほしてひいそうよ志の
びのともゆそれこるきがらいのりのゆそ
ゆえさきよりかきらべしまもやうこゆそ
ひやうきのさまにるしあくべし二日のうちゆい
るにかのるをたろりつらいひやうきのアまひとそ
かしこにいてりうせ志ひしよしひろうまべし
そしまでいそのたろへれこるきがらをあづけ
あくるをつけてまりるべしと北の方のあゆせ
に十次べるるきがらにへいふるしその夜
るをたろりてよし肉がるきがらを志もやうえ
うつしけり

第五図

さて此日よりぎひめに行川とい

うぎのたのらうちよを
つけてかのよし肉がとらへる
きく寿ぐうが玉の
らうへつ辺北の
方のにしよ
よし肉まゐく
ありしうどもへんしん
るしておのくをとらへと
きし西ゑにらいおのくへ
つがひしとまだたがひしるを
つよくいさめやまりしその
アにふくしあらさめてひめを
むかひしよつうせいへ志ちのゑ
れこらくこがひるくきう
ゑへと行川がにしに
きく寿白きくさそ
とそるぎのたどのい
るさけふしとよろこび
人くをやりつしよし肉が
べつのやうえあんるのに
つしそいらうけり
●此人くのるうにかの
さぎよりぎもん
さくゐんの次へ

白菊丸

菊寿童

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

榮久堂刊行藏板略目

永花百人一首文十抄　首書繪抄

源氏五十四帖　桃彩色　小錦繪

御誂染逢山鹿子　六編揃

教訓寶揃　初編近刻

東都錦繪所　江戸よし町おやぢ橋角　山本平吉梓

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

なりそうろう死口上さうろう
おもと入りくどもの国の
つごでぶいりみねぎなる
江戸永住ぐい祝ぎ
一丁目京伝ぢそ
●女ごころみる系
男大ぎらやく
くさの兎丹ねう
やくまぼ松八一文五文
まえ二文ろ下女の五十ぬ上
さうろう月やくさろ内ふそろむ
る妙ろり男ハかりふまおぎらさ
だくとも考ぬせのりきふちさろ
かしても分ふさろろろ男そ
その妙をまろべ●十二味某ありろ粉
水晶粉まの一袋百三十二せん
ろうれどのおまえぐろうも一袋男まえぐ
玉のごとう●そえぐろうも●あぜも●やけど
●切きまゆ妙ろの妙ろ近年大ふろまり
あろぐろれあろろの応用やもおろりやの
●極上ありろの悪玉のうへ六十四せえあくぬを
えろあろれ五十六せん●ろ手のありろの（一）

菊寿童十編下巻

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

六娘

さるおどりの
久めの水ぐち
清次ぐるまぎのたてばんの
あふせふようてう門が
さるぎうをらをそ
するやうれそう
あるもやうろうて
やまうひみやうと
らひそあそば
ゆへ清次ぎふせうまう
久めの水
つまのお梅
もつれそひ
てようそあひ
かんびやうの
てのふ白けり
さそうぎ
ぐるをそうふ
うつーうる
ある日の夜

(一)

(二) ようひのやどの十九
ぐるふうふ見
ぐるをれうーあく
ひまうぶのそとふ
まりりけるぐ夜ふふ
りとうてえめの水

(三)

(四) お梅あやふかりそ
まりけるふ後へあんくと

(五)

(六) うせおしーを
はけらへつもり
みのるぎのそ
さまのおそろ
らひやへこけ
あるのるーん
そうぎもろ
人ふあひみふ
をきうふ
みのとうひ
うてつぎく
ぎうりれん
びまうふ
こうひ
なぐうり
あまれ
ぎのそ
さま
あんまひ
とて
こへ入り

(七)

(八) 夢ようきさ
ころくとものてうん
なうりーやおとき
りてセットにだりりてご
ふのつうまこてうく
とてごあひふ
お梅へのそ
ぐ
うせ
めーを
おころ
ゆありて
ゆるぎ
ぐうんへ
おうんをまろ

(九)

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

さてもさても時ハ
きてやや血ごとなるの
あるこゝろなびきと
ろゝろゝあるもやくこゝ
死ぐのなかくー
ようざうめんだうが
ひもくだるのふ
きてーもゑ
わてしつゝ
あのやう
ようにハ
みぐどこ
ゐる天を
あるまぐ
うひしちう
うあく
人あるの
あれ
つゝうをれ
るおもん
をくおこまハ
ひんさこゐそ
かれおひて
さて日

(二)
くびうきこむうらんへ
らくふー
ま仕ぐびふ
あるそゝをきゑかへー
「りくさまあつーやうこゝ
かけさせんもふびんこゝ
そくこーふつけて立さうけり(三)

(三)
八阪
ちゝふ久めのかなまのり
おこるまもーんのゑた
ぐゝふくひげうれがたち
きこーんとれのゝとまで
さうぐうをゐの八ぢこれて
男ゐのちうを久めの仕ぐ
今こゝうちるうゝ久ハ
あそるゝこゝちふ
るくゐやうしをるる
ふさゐもうたむと
こうしとうろ
くびんのまり
やとてもゝ
えこゝきこ
せわべるうねむこ
こくまのせうふく

ある
えぼ
うろの
おまつ

久米の仕

かこきーこゝをぐんびろそまりくう
みぐどえたりけてぐざれせをと
こゝふつけるひとうみあんおこう
あさけれいぎうのつれこそちが
おせうかんまんせうまりのゝんひを
そゝそのえもあゝけれあふんびいひぐ
るまどそちがむざこれいえんんふる
べーはびりくうが仕ごようのもきこうう
ゑ菊お者へおりしう肉つゝうのおんぜんへ
みぐどの作まされべワダあづうおくこそ
きいのひうれおんせんをみどふ
おこちう肉がんびえへ
らんふへびまづそれふ
ひえそれうこんひっさげ
てあくへりもどうきさう
「りふふふさる世が世ふ
あらばん玉のもあべたが
トあゝえるこぶんれけど
「あく人へこゝもう肉おまうこのまうけん(一)

その二

たれるうんと
こををこれば
おのしうこざる
えぎのえこぜん
さうきらんとえさ
る久めのかをこ
そゝめかのーこ
ゐ立さる

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728
ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

十廻

きうそくどふ
よそこまねぢ
けん(一)

(二)ろぼをぐるうこみをたゝみと
おりのようろうよう叶うせーときてくまろ
ようこびけるふぢあのひさあたのきん
きるたゝえの名いと奥方だう
山ふうくれ山ぐち
ふむすめようのき
きくまろあて
叶うせて
(三)

ようにまねぢけ

(四)

の方さうよんとたくさけるが
そのつてをそなさりしふあの日
ほさごのくみーま
叶ふ(一)

ほさごの方よ
つゆるゝ
松風

あさこのゆまそまさうよ
のちいやうさかくまこ
ろうえかのぎうのつぼ
わが依ごろのち
きくろうるようせ
つひたうのあん
ぜんを(三)

のかーらくさりふむ
ひめをめあうせきく
白ぎくたをもう

ろうえかのぎうのつぼ
わが依ごろのち
きくろうるようせ
つひたうのあん
ぜんを(三)

ろうとろうるぎのえんこぜん
たこあろうときさぐつ
ろうろうをうきたて

(四)

ゆんときさまうこふるふのた用でひとが咲(五)

ほさごの方よ
つゆるゝ
松風

むうんあるうでつあをるくるがえのむすめゆをさるうえふ松風とのくるわ
るうえれが油をりくけるをの松風おまへねぢけぎのたらう

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

▼袖を「されがさまざまこごさまくや上るかまくらの「すまのやさのいこれおとさ」がをつうふんこうふ松風ゑえもうこうけとうそかくれもかなせき小つまひたもげ

「十一段」

そさこさそおそうぎのそこぜんいうそさるそうとのいうそおこのりおつぐのわうふりけうくもさまの方よるらくもも

ああ「なおそのやうんとおぞつうのきさみのやうえいうけれかかの松風がめるいおそあうかをそのうくもをそのおおまふちうきこうとのおおまふものうけうえせそで「あすあの女中てふぐこりてのこうくそそやうくとこりまきけれうるさのうえちおうろれこりやえとるうさうくそ●松風「なうふんかうとうかく

「あぎのそ」

ああとさんは

（二）

そのお中まおおまふのうけれがうぎのそをつうやまぐまがの皿代目よりうやニキうけれがまき子の方ああが下このまうりおそうきく梨おおまふのうぎをつうやまぐまがの皿代目よりうやニキうけれがまき子の方ああが下このまうりおそうきく梨

（三）

（四）

（五）

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

嘉永二年己酉春新版稗史目録

邯鄲諸國物語 十編 柳亭種彦作 十一編 一陽齋豊國画

菊壽童霞の盃 山東庵京山作 十編 大尾 一陽齋豊國画

仙女香七變化粧 十返舍後一九作 二編 一陽齋豊國画

朧月猫のさうし 山東庵京山作 七編 大尾 一勇齋國芳画

狙公真實錄 笠亭仙果作 初編 一勇齋國芳画

春の文しらの艸紙 山東庵京山作 三編 四編 一陽齋豊國画

隅田川月姿見 式亭小三馬作 三編 一陽齋豊國画

美艶仙女香 一包四十八銅 京橋南傳馬町三丁目 坂本氏製
黒油美玄香

榮久堂 江戸芳町親仁橋角 山本平吉版

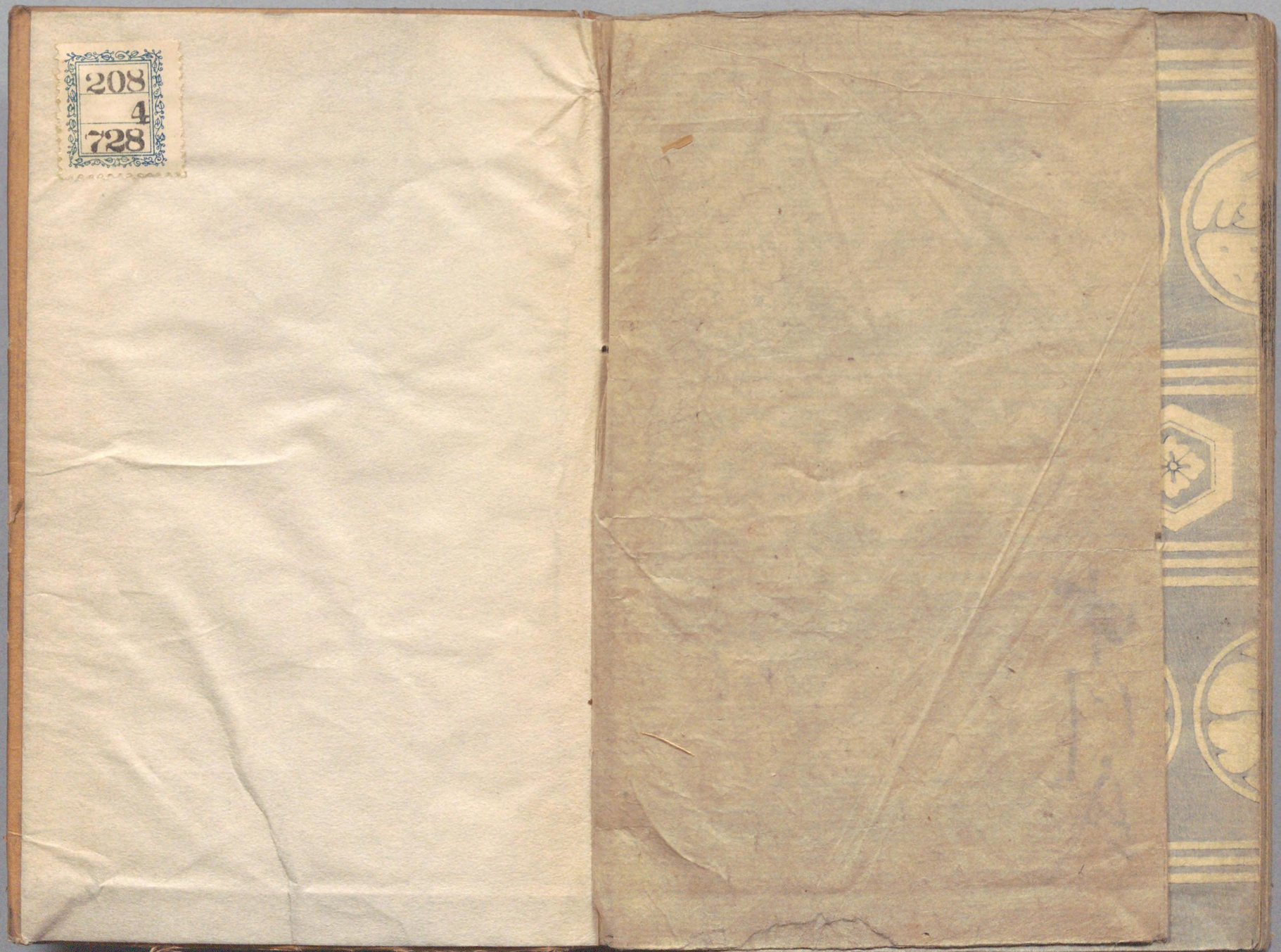
国立国会図書館 菊寿童霞盃 208-728
ガラス使用

208
4
728

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

208
4
728



国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用

国立国会図書館　菊寿童霞盃 208-728

ガラス使用